

林春男教授・田中仁史教授のご退職によせて

林春男先生は任期を 1 年と 6 か月残して平成 27 年 9 月 30 日付けで京都大学を退職され、田中仁史先生は平成 28 年 3 月 31 日付けで定年退職されました。両先生は、長年にわたり京都大学防災研究所における優れた研究と教育、さらには種々の防災関連実務における社会貢献をなされました。

林春男先生は、昭和 49 年 3 月早稲田大学第一文学部心理学科を卒業後、同年 4 月に早稲田大学大学院文学研究科修士課程に入学、昭和 51 年 3 月同課程を修了されました。昭和 51 年 4 月、同大学院博士課程に進学され、昭和 58 年 3 月、同課程を中途退学されました。この間、昭和 54 年 9 月よりカリフォルニア大学ロサンゼルス校大学院心理学科博士課程に入学され、昭和 58 年 3 月、同課程を修了後、同年 6 月に Ph.D. を取得されました。同年 4 月、弘前大学人文学部専任講師になられ、昭和 60 年 8 月、助教授に昇任されました。昭和 63 年 9 月から、広島大学総合科学部助教授として勤務されました。平成 6 年 4 月、京都大学防災研究所附属地域防災システム研究センターに助教授として転任され、平成 8 年 5 月より京都大学防災研究所附属巨大災害研究センター教授に昇任されています。平成 27 年 9 月 30 日に退職され、同年 10 月から防災科学技術研究所理事長を務めておられます。

研究活動については、社会現象としての災害学理の究明と、効果的な防災の実現を目標とした研究において多大な貢献をされています。とくに、災害発生後、人々は新しい現実における振る舞い方を学び、自分の位置付けを受け入れられる過程が必要となることに着目し、災害対応を個人、社会が新たな現実をどのように認識し、対応していくのかという情報処理過程として捉え、災害による人々の苦しみの軽減を図ることを目的に、Business Continuity Management の枠組みにもとづいて多くの実証的な研究をされています。

具体的には、1995 年の阪神淡路大震災を始め、2001 年米国同時テロ、2004 年新潟県中越地震、2005 年ハリケーンカトリーナ、2007 年新潟県中越沖地震、2011 年東日本大震災、2012 年ハリケーンサンディ等の国内外で発生した大規模災害について災害発生後の社会の立ち直りの過程対応に関する現場でのアクションリサーチを通して、効果的な災害対応を可能にするための社会のしくみの構築・情報システムの開発を目指し、1) 災害時の人間の心理過程や行動の理解、2) 防災担当組織の効果的な対応、3) 地域社会全体の災害からの復興という 3 つの領域で、社会実装につながる成果を生み出されました。

その成果は、災害時の人間行動に関する理論構築に始まり、地域の防災力の向上に向けた戦略構築、ISO22320 にもとづく災害対応における情報処理と組織運営の標準の確立、G 空間情報 (GPS+GIS) を利活用した危機管理のための情報認識の統一の推進、災害復興過程に関する理論構築、戦略的な防災計画策定手法の開発、防災リテラシーの向上方策の体系化等、多岐にわたっており、どれも国内外で高く評価されています。

教育面では、京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻、京都大学工学部地球工学科などの講義を担当され、研究室や関連する学科、専攻の多くの学生の教育や研究指導に情熱を注ぎ、社会で活躍する高度な研究者や技術者の育成に努められました。また社会人や海外からの研究者を積極的に受け入れ、その研究活動を支援するとともに、講演や講義を通じて社会貢献や国際貢献にも努めてこられました。

学会活動としては、地域安全学会、日本自然災害学会、日本心理学会、土木学会、日本建築学会、日本自治体危機管理学会などに参加され、また TIEMS (国際危機管理学会) 日本支部の設立に尽くされました。

社会的活動として、文部科学省科学技術・学術審議会専門委員、日本学術会議連携会員、ISO/TC292 国内委員会委員、社会資本整備審議会河川分科会気候変動に適應した治水対策検討小委員会、「防災スペシャリスト養成」

企画検討会座長，荒川区顧問など，国や地方自治体に関係する多くの委員会の委員，座長職に就き，各種の技術的・政策的課題について，学識者の立場から助言，提言を行ってこられました。これらの貢献に対して，平成 18 年防災功労者防災担当大臣表彰や平成 25 年防災功労者内閣総理大臣表彰など，多くの賞を受賞されています。

以上のように，林春男教授は学術研究と教育の各分野において多くの業績を挙げられ，学術研究の発展と，社会現象としての災害学理の究明と効果的な防災の実現に向けた進歩および国際交流に多大な貢献を果たされました。

田中仁史先生は，昭和 49 年 3 月京都大学工学部建築学科を卒業後，同年 4 月に京都大学大学院工学研究科修士課程建築学専攻に入学され，同課程を修了後，昭和 51 年 4 月同博士後期課程に進学され，昭和 54 年 3 月同課程を単位取得退学されました。平成 2 年 12 月にはニュージーランドカンタベリー大学で Ph.D. (工学) を取得されています。職歴としては，昭和 54 年 4 月に国立明石工業高等専門学校建築学科講師 (常勤) になられ，昭和 58 年 4 月助教授に昇任されました。昭和 59 年 9 月から昭和 60 年 3 月までカンタベリー大学建設工学科 (ニュージーランド) に出張され，また昭和 61 年 3 月から昭和 63 年 8 月まで同大学に研究員 (Research Associate) として勤務されました。昭和 63 年 9 月に京都大学工学部助手に転任後，平成 2 年 10 月に京都大学を退職され，同年 11 月カンタベリー大学建設工学科講師 (Lecturer) になられ，平成 5 年 2 月同助教授 (Senior Lecturer) に昇任されました。平成 7 年 3 月にカンタベリー大学を退職後，同年 4 月に豊橋技術科学大学工学部助教授になられ，平成 13 年 4 月に京都大学防災研究所教授に昇任されました。平成 25 年 4 月から，東京工業大学客員教授も併任しております。

研究活動では，鉄筋コンクリート構造，木質構造，耐震設計，津波による鉄筋コンクリート衝撃破壊の分野において幅広く研究を行ってこられました。鉄筋コンクリート構造では，帯筋のコンクリートに対する横拘束効果の実験的評価，横拘束されたコンクリートの応力歪関係のモデル化，また大断面試験体を製作，寸法効果の同応力歪関係に及ぼす影響を明らかにされています。平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震以降は，その時発生した津波浮遊物による鉄筋コンクリート建物の破壊現象に着目し，鉄筋コンクリート耐震壁の衝撃破壊実験を行われ，衝撃物の質量，速度と貫入深さ，背面剥離などの関係を明らかにされ，繊維補強することの有効性を示されました。木質構造においては，プレカットによる新しい継手工法の提案と継手強度の実験的評価を行われ，また，集成材を使った大断面スラブでは，プレストレスト鋼棒を用い大スパン構造を可能にし，その設計手法を確立されました。

教育面では，工学部建築学科，大学院工学研究科建築学専攻の講義を担当され，研究室や関連する学科，専攻の多くの学生の教育や研究指導に情熱を注ぎ，社会で活躍しうる高度な研究者，教育者や技術者の育成に努めてこられました。また，海外からの留学生，研究者を積極的に受け入れ，その研究活動を支援するとともに，平成 22 年には浙江大学 (中国) の客員教授として招聘され，耐震設計の授業を行われました。

学会活動としては，日本建築学会，日本コンクリート工学協会，ニュージーランド地震工学会，アメリカコンクリート学会，地震工学世界会議，台韓日建築構造地震工学合同セミナー (SEEBUS) などに参加され，鉄筋コンクリート構造，耐震設計に関連する分野の研究振興に尽くされました。平成 4 年 4 月から 1 年間は，東南アジアおよび環太平洋工業教育委員会 (AESEAP) 出版編集委員，また，同年日米ニュージーランド高強度コンクリート研究委員会のニュージーランド幹事を務められました。

日本建築学会では，平成 8 年より平成 22 年まで日本建築学会鉄筋コンクリート構造運営委員会委員，平成 9 年より平成 24 年までは日本建築学会プレストレストコンクリート構造運営委員会委員などを歴任されています。

社会的活動として，日本建築センター，日本建築総合試験所，プレハブ建築協会，日本建築防災協会に参加さ

れ、建築基準法 37 条第二項に基づく新材料の大臣認定、超高層ビルの大臣認定、既存不適格建築物の耐震改修工事の認定など我が国における建築物の安全性の向上に大きく寄与されました。また、国土交通省国土技術政策総合研究所建築構造基準委員会、京都府建築物耐震改修促進計画策定検討委員会など、国や地方自治体に関する多くの委員会の委員、委員長職に就き、各種の技術的課題に対して、学識者の立場から助言、提言を行ってこられました。

日本コンクリート工学協会 ISO TC71（鉄筋コンクリート構造の国際基準）においては、平成 17 年から平成 19 年まで副委員長、平成 19 年から平成 20 年までは委員長を務められ、日本の基準が国際基準を満たしていることを示されました。国際コンクリート工学会（fib）においては、平成 14 年から耐震委員会の日本代表幹事、現在は TG 7.6 委員長を務め、日本の耐震基準を世界に紹介しておられます。

京都大学防災研究所の副所長を務められた時には、当時の河田恵昭所長とともに京都大学の建物強度の診断を全学的に行うよう指導され、全国でもいち早く京都大学が耐震・耐火改修を推進することになりました。このことは特に付記させていただきたいと存じます。

以上のように、田中仁史教授は学術研究、教育さらには社会貢献の各分野において多くの業績を上げられ、学術研究の発展と建築物の耐震設計、対津波設計の進歩および国際交流に多大な貢献を果たされました。

以上述べましたように、林春男先生、田中仁史先生は、65 年に及ぶ防災研究所の歴史のなかにおいて極めて優れた足跡を残していただきました。両先生のご貢献に心より敬意と感謝の意を表する次第であります。ご退職後も益々ご健勝にてご活躍されますことをお祈り申し上げます。

平成 28 年 4 月

京都大学 防災研究所 所長
寶 馨